

『闇よ、名乗れ』

天瀬裕康著

「医家芸術」誌（文芸特集号）に連載（平成16年〜19年）されていた長編「闇よ、名乗れ」が完結し上梓された。これは作家、天瀬裕康のライフワークともいべき作品である。

構成は第一章「霧と呻きと閃光」から第二章「炎と肉片の意識」、第三章「不信と惑いの世界で」、第四章の「明日は夜が明けるか」までの本編に、ダンテ、甘草四郎、ヘルダーリンなど二者の挿話を組み合わせるという、かなり複雑な形をとっている。主人公の楠名山彦の時空を超えた彷徨、あるいはその内面への歷程が克明に描き出されている。

天瀬裕康は創作の他に、レーゼドラマや評伝に秀れた業績を残しているが、ヨーロッパ中世を舞台にした、いわゆるゴ

シック文学の範疇に入る作品も発表していることは、あまり知られていない。

今回の「闇よ、名乗れ」には、その中世の該博な知識が随所に現われており、同時にまた、明治維新の開

評 山田 遼

欧米文化の奔流に翻弄されたアイデンテティの苦悩を活写



デンテティの苦悩が鮮やかに描写されている。

戦争体験、ことにヒロシマ、ナガサキの被爆の爪跡。さらには長いキリシタン弾圧が残した傷痕など、我が民族が抱えているさまざまなトラウマは、まだ決して解消されていないが、過去の苛酷な記憶から、ともすれば目をそむけ

がちな我々と異なり、作者はあくまで真摯な視線を向け続けている、一步も退こうとはしていない。その情熱と意思力には、まことに感服せざるを得ない。本書を秀れたビルドダウン・ス・ロマン、あるいは教養小説として、広く江湖に推奨するものである。

（近代文芸社・2000円＋税）

会員の著作を紹介する欄です。近著を事務局まで送ってください。